

抗生物質：どのようなものか、 どのように使うものか

抗生物質は正しく使えば、ことのほか有用かつ重要な薬である。抗生物質は、**細菌**が起こす感染や病気とたたかう。よく知られている抗生物質には、ペニシリン Penicillin、テトラサイクリン Tetracycline、ストレプトマイシン Streptomycin、クロラムフェニコール Chloramphenicol、そしてサルファ剤 Sulfa すなわちスルフォンアミド Sulfonamide がある。

それぞれの抗生物質は、それぞれ特定の感染に対して、異なった仕組みで作用する。どの抗生物質も、使えば危険が伴う。とびぬけて危険なものもいくつかある。抗生物質の選択と使用には、充分注意を払うこと。

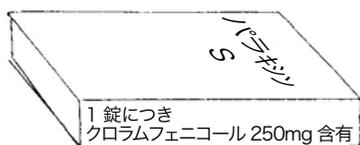
抗生物質は種類が多く、それぞれいくつかの異なった<商標名>で売られている。紛らわしいが、ほとんどの重要な抗生物質は、いくつかの主要なグループのどれかに分類される。

抗生物質グループ(一般名)	商標名の例	あなたの地域の商標名(書き入れる)	参照ページ
ペニシリン Penicillin	ペンVK PenVK	_____	351
アンピシリン Ampicillin*	ペンブリチン Penbritin	_____	353
テトラサイクリン Tetracycline	テラマイシン Terramycin	_____	356
サルファ (スルフォンアミド Sulfonamides)	ガントリシン Gantrisin	_____	358
コトリモキサゾール Co-trimoxazole	バクトリム Bactrim	_____	358
ストレプトマイシン Streptomycin, その他	アムビストリン Ambistryn	_____	363, 359
クロラムフェニコール Chloramphenicol	クロロマイセチン Chloromycetin	_____	357
エリスロマイシン Erythromycin	エリスロシン Erythrocin	_____	355
セファロスポリン Cephalosporin	ケフレックス Keflex	_____	359

* 留意点：アンピシリン Ampicillin はペニシリン Penicillin の一種で、普通のペニシリン Penicillin より、殺す細菌の種類が多い。

商標名の抗生物質があって、それがどのグループに属するものかわからない場合は、瓶または箱の細かい字の印刷を読む。

たとえば、パラキシンS Paraxin S とかいう薬があるが、中にはいっているものが何なのかわからない、という場合は、細かい字の印刷を読む。〈クロラムフェニコール Chloramphenicol〉と書いてあるはずである。



グリーンページ (p.357) で、クロラムフェニコール Chloramphenicol をひく。腸チフスのようなきわめて重い病気の場合にしか用いてはならないということと、新生児に与えればことに危険であることがわかる。

どのグループに属するのか、何の病気とたたかうのか、安全に使うためにはどのような予防措置を講じるべきか、ということを知ってからでなければ、決して抗生物質を用いてはならない。

この本で勧めている抗生物質の用途、投与量、危険性、予防措置などについての情報は、グリーンページに載せている。グリーンページの初めのほうにあるあいうえお順の項目で、薬の名前を探す。

■すべての抗生物質の使用に関する指針

1. その抗生物質の使い方と、何の感染に用いることができるのかを正確に知らない場合は、用いないこと。
2. 治したいと思う感染に対して、勧められている抗生物質のうち、1種類だけを用いること。(この本で何の病気をかを探す。)
3. 抗生物質を用いる場合の危険をすべて知り、指示されている予防措置を講じること(グリーンページを参照)。
4. 抗生物質は指示されている量だけ用いること。それより多くても少なくともいけぬ。投与量は、病気の種類と、患者の年齢や体重によって異なる。
5. 経口で同様の効果があるような場合、決して抗生物質の注射をしてはならない。注射は、絶対に必要な場合にだけ行う。
6. 病気が完全に治るか、熱その他の感染症状がなくなったあと、少なくとも2日間は抗生物質を用い続けること。(結核やハンセン病のようないくつかの病気は、患者が快方に向かった後も数ヶ月間または数年間手当てを続ける必要がある。それぞれの病気についての指示に従うこと。)
7. 抗生物質を使用して、皮膚の発疹、かゆみ、呼吸困難、その他の危険な反応が現れた場合、その患者は使用を中止しなければならない。そして、**以後再びその抗生物質を用いてはならない**(p.70を参照)。
8. **抗生物質は、必要性が大きい場合にだけ用いること。**抗生物質を使いすぎると、次第に効かなくなり始める。

■ある種の抗生物質の使用に関する指針

1. ペニシリン Penicillin またはアンピシリン Ampicillin を注射する場合は、患者が万一アレルギー反応を起こしたときにそれを抑えるために、**アドレナリン Adrenalin**(エピネフリン Epinephrine)のアンブルを、前もって必ず用意しておく。
2. ペニシリン Penicillin に対してアレルギーのある患者には、エリスロマイシン Erythromycin またはサルファ剤 Sulfa の何か(p.355 と p.358 を参照)のような、別の抗生物質を用いる。
3. ペニシリン Penicillin その他の**狭域スペクトル**(限られた種類の菌に効果がある)の抗生物質で抑えられるはずの病気に対して、テトラサイクリン Tetracycline、アンピシリン Ampicillin その他の**広域スペクトル**(多くの種類の菌に効果がある)の抗生物質を使用しないこと(p.58を参照)。広域スペクトルの抗生物質は狭域スペクトルの抗生物質より、はるかにたくさんの種類のバクテリアを攻撃する。
4. 原則として、クロラムフェニコール Chloramphenicol は、腸チフスのようなある種の致命的な厳しい病気にだけ用いる。クロラムフェニコール Chloramphenicol は危険な薬である。**決して**軽い病気に用いてはならない。また、決して新生児に与えてはならない(百日咳の場合を除く。p.313を参照)。
5. テトラサイクリン Tetracycline またはクロラムフェニコール Chloramphenicol は、決して注射してはならない。これらの薬は、経口的に用いるほうが安全で、苦痛が少なく、よく効く。
6. テトラサイクリン Tetracycline は、妊娠中の女性や8歳未満の子どもに用いない。新しくできる歯や骨を傷める恐れがある(p.356を参照)。

7. 原則として、ストレプトマイシン Streptomycin およびそれを含む薬は、結核だけに用いる。また、いつも、ほかの結核治療薬と共に用いる (p.363 を参照)。ストレプトマイシン Streptomycin は、アンピシリン Ampicillin が手に入らない (または値段が高すぎる) 場合に、ペニシリン Penicillin と組み合わせて、腸に受けた深い傷や虫垂炎その他の特別な感染に対して用いてもよい。しかし、風邪、インフルエンザ、その他の普通の呼吸器の感染に用いてはならない。
8. ストレプトマイシン Streptomycin グループの薬 (カナマイシン Kanamycin とゲンタマイシン Gentamicin を含む) は、きわめて毒性が強い (有毒である)。軽い病気に対してこれらの薬が処方されることが多すぎるが、使えば、有益であるより有害である。これらの薬を使うように指示されている、きわめて重い感染にだけ用いること。
9. ヨーグルトまたは凝乳を食べれば、アンピシリン Ampicillin のような抗生物質によって殺されたからだに必要な細菌を補充できる。また、からだの自然のバランスを正常に戻す助けになる (次ページを参照)。

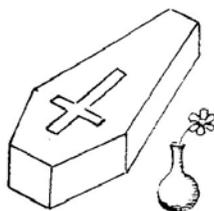
■抗生物質が効かないように見える場合はどうすればよいか

抗生物質を用いると、ほとんどの普通の感染は、1 - 2 日で改善を見せ始める。用いている抗生物質が役立っているように見えない場合は、次のことが考えられる。

1. その病気が何であるかの判断が誤っている。用いている薬が適切でないのだろう。何の病気なのか、もっと正確に理解することにつとめて、そのうえで、正しい薬を使用すること。
2. 抗生物質の投与量が正しくない。確かめること。
3. 細菌がこの抗生物質に対して耐性になっている。(もはやこの細菌はこの抗生物質によっては殺されない。) その病気に対して勧められている抗生物質の中から、別のものを選んで試してみる。
4. 病気の治し方について、十分に理解していない場合。医療従事者の助けを得ること。ことに、病状が重かったり悪化していたりする場合は、そのようにすること。

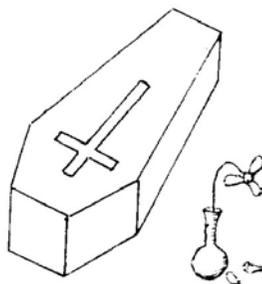
この3人の子どもたちは風邪だった…

悪者は何か？



ペニシリン Penicillin である！
(p.70 のアレルギーショックの項を参照。)

吊いの鐘を鳴らしたのは何か？



クロラムフェニコール Chloramphenicol である！ (この薬の危険性と予防措置については p.357 を参照。)

この子どもはなぜもとのように元気になったのか？



危険な薬を飲まないで、くだものジュース、よい食事、休息をとったからである。

抗生物質は、普通の風邪には用を成さない。

抗生物質は、効くことがわかっている感染にだけ用いる。

■抗生物質をむやみに用いないことの大切さ

どんな薬であっても、むやみに使ってはならない。これは、抗生物質について、特に言えることである。その理由は次の通りである。

1. **中毒と影響**。抗生物質は病原菌を殺すが、それだけではなく、中毒やアレルギー反応を起こすことによって体をも傷つける可能性がある。毎年、不必要な抗生物質を用いたために、たくさんの人が死んでいる。
2. **自然のバランスを乱す**。体の中の細菌全部が有害なわけではない。体が正常に働くために必要なものもある。抗生物質は、有害な細菌を殺すついでに、よい細菌も殺してしまうことが多い。抗生物質を与えられた乳児は、口（驚口瘡、p.232）または皮膚（モニリア症、p.242）の真菌または酵母菌の感染が進行することがある。これは、真菌類を抑えている細菌を、抗生物質が殺してしまうからである。

アンピシリン Ampicillin その他の**広域スペクトル**の抗生物質を数日間用いている患者で、下痢が進行するのも、同じような理由による。抗生物質が、腸内の細菌の自然のバランスを乱しながら、消化作用に必要ないくつかの種類の細菌を殺しているのだろう。

3. **治療に対する抵抗性**。長期的な観点からすると、抗生物質をむやみに用いてはならない最も重要な理由というのは、抗生物質を使いすぎると、だんだん効かなくなるからである。

細菌は、同じ抗生物質から何度も攻撃されると、次第に強くなって、もはや殺されないようになる。その細菌はその抗生物質に対して、**耐性**になる。このため、腸チフスのようなある種の危険な病気の手当てが、数年前よりずっと困難になってきている。

クロラムフェニコール Chloramphenicol は、普通は腸チフスの最良の治療薬であるが、いくつかの地域では、腸チフスはクロラムフェニコール Chloramphenicol に対して、耐性になっている。クロラムフェニコール Chloramphenicol は、軽い感染や、ほかの抗生物質を使うほうが安全でよく効くような感染や、抗生物質がまったく必要でない病気に対して、あまりにもたくさん使われてきた。

世界中で、重大な病気が抗生物質に対して耐性になりつつある。軽い感染に対して抗生物質を使いすぎているのが、主な原因である。**抗生物質にこれからも生命を救ってもらおうとするのであれば、その使用を、現在よりずっと制限しなければならない**。これは、医者と保健ワーカーと人々自身が、賢明な使い方をするかどうかにかかっている。

ほとんどの軽い感染に、抗生物質はいらないし、使うべきではない。軽い皮膚感染は、通常、刺激のないせっけんと水で手当てしたり、温湯につけたり、ゲンチアナ紫 Gentian violet(p.371)を塗ったりすれば、充分効果がある。軽い呼吸器感染の手当てには、水分をたくさん飲み、よい食物を食べ、休息を充分にとることが一番である。**ほとんどの下痢に対して、抗生物質は必要でないばかりか、有害だろう**。最も重要なことは、水分をたくさん摂ることである(p.155)。そして、下痢の子どもが食べるようになったら、直ちに充分な食物を与えることである。

からだ自分で充分たかえるような病気には、
抗生物質は用いない。
抗生物質は、どうしても必要なときのために残しておくこと。

抗生物質の賢明な使い方を学ぶためには、**保健ワーカーの学習を助ける**の第19章の、もっと詳しい説明を参照。